

脈々と続く性質のものだが、それに対置したところだとえば青
来有「雪の聖地」(『文學界』一九九七年六月号)を挙げることは
できるだろう。「原爆で死んだ人たちのつらく陰惨なイメージを
逆転させたかった」という意図のもとに書かれたこの作品には、
原爆による死者達が喉の渴きを癒すために「ぼわんぼわんと跳ね
て、みんなで金魚のように雪を食べて」いるという、冬の爆心地
の幻影が描かれる。この作品について青来は川村との対談で、

誤解されるかもしれませんが、小説の中で原爆の悲惨さを
訴えたいとか、キリシタン迫害の歴史を追及したい気持ちは、
とくに強くないんです。むしろ長崎という土地が持たされ
ている既成のイメージや物語をひっくり返してみたいという
気持ち強い。最新作の「雪の聖地」で、冬の爆心地を舞台
に設定したのも、その思いからなんです。

と説明する(『文學界』一九九七年七月号)。誤解や不謹慎を恐れな
い試みが、「体験」の周辺で始まっている。むしろ、それらを恐
れていては前に進めない段階に、「体験」の語りは立たされた
と考えたほうがいい。「不謹慎」であることが(たとえば無関心であ
ることよりも)問題を能動的に動かしていることだけは、確かだ。

ところで最後に、そもそも「不謹慎」とはいったい何だろう、
と思ひ辞書でひいてみたので紹介したい。『日本国語大辞典第二
版第十一巻』(小学館、二〇〇一年十一月)では「慎みのないこと。
謹慎をしないこと。ふまじめなこと。また、そのさま。」との説
明がある。一方、「恋愛」を「特定の異性に特別の愛情をいただき、
高揚した気分で、二人だけで一緒にいたい、精神的な一体感を分
かち合いたい、出来るなら肉体的な一体感も得たいと願いながら、
常にはかなえられないで、やるせない思いに駆られたり、まれに
かなえられて歓喜したりする状態に身を置くこと。」と説明した
ことでその斬新さが一時話題を呼んだ『新明解国語辞典第五版』
(三省堂、一九九七年十一月)によると、「不謹慎」は次のように
説明されている。

「心の抑えがきかず、衝動に任せて行動する様子。」
今後もさまざま「不謹慎」によって、「体験」をめぐる議論
がますます感情的に、複雑に、そしていくつもの世代を貫く問題
として充実していくことを期待している、とたきつけて締めくく
るのは不謹慎だろうか。